研究プロジェクトを振り返って

―歴史学研究におけるコンピュータの有効性―

六反田 豊：九州大学文学部

本重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」には、まず1995年度に公募研究「大韓民国に残る「沖縄関係資料集成」作成のための基礎的研究」（研究代表者：松原孝俊）の研究分担者として、そして翌1996年度からは計画研究「環東シナ海地域間交流史―中国江蘇浙江・朝鮮―」（研究代表者：川勝賢亮）の研究分担者として参加させていただいた。

朝鮮中世・近世史を専攻する私にとって、この研究プロジェクトが対象とする琉球・沖縄はまったく未知の分野でもあり、それだけに戸惑うことも多かった。しかしその反面、いろいろと新しい勉強もさせていただいたと思う。その主要なものは、やはり本研究プロジェクトの最大の課題でもあった歴史学研究へのコンピュータの利用についてである。

私自身、パーソナルコンピュータ（パソコン）を自身の研究に用いるようになってすでに数年になる。もはやパソコンなしの研究は考えられない。とはいえ、それはあくまで個人レヴェルでの話である。本研究プロジェクトのような、コンピュータを組織的かつ大規模に歴史学研究へ導入しようとする試みは、当然ながらまったくの初体験であった。むろん、本研究プロジェクトに参加した大部分の歴史学研究者にとっても、事情は同じであったろう。当初はプロジェクトの進め方について、それゆえの疑問や疑念を少なからず抱いたこともあった。しかし、情報分野の研究者との共同作業の過程で次々と新しい方法・技術が考案され、実用化されていく光景はまさに感動的であり、いまでは、歴史学研究の新しい可能性を確信してやまない。

とりわけ、ここ2、3年間におけるインターネットの急速な普及は、歴史学研究におけるコンピュータ利用の幅を大きく広げるものであると思う。インターネットの普及によって、ネットワークを介した史料・文献の入手はきわめて容易となった。だが、その一方で、著作権やデータ改変など、解決すべき新たな課題が出てきていることも見逃せない。また、歴史学研究の場合、データの互換性・共通性といった問題もこれらに劣らず重要である。データファイルは特定のアプリケーションソフトに依存するものではなく、互換性のある形式（たとえばデータベースならCSV、TSVなどの形式）でなくてはならない。さらに漢字を含めた文字コードの世界共通化も大きな課題である。

これらの問題については、もちろん本研究プロジェクトでもそれなりの対応が検討された。しかし、これはもはや、たんに日本そして歴史学研究だけにとどまる課題ではなく、その解決のためには多方面からの国際的な共同研究が必要であろう。本研究プロジェクトは、沖縄関係史料の電算化、ネットワーク化という当面する課題に加えて、そうした今後へ向けての足場を築いたという点でも、意義深いものだったのではないだろうか。と同時に、私を含めて、これに参加した歴史学研究者ひとりひとりが、歴史学研究におけるコンピュータ利用の有効性をあらためて認識したことが、なによりの成果だと思う。